
竜の詩

lyuvan

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の詩

【Nコード】

N1309X

【作者名】

lyuv an

【あらすじ】

教団に両親を殺された竜の復讐物語

事と次第によってはpixivでも投稿するかもしれません。

始まりの悪夢 その一（前書き）

こちらでは、初投稿

短いし不定期だし駄文だしと悪いところが多い作者ですがよろしく
お願いします。

始まりの悪夢 その一

始まりの悪夢 その一

こんな夢を見た。

幸せの終わったあの日の夢

独りになったあの日の夢

そして、復讐を誓ったあの日の……。

あの日の事は今も憶えている。

何時ものように、朝早くから村の近くにある川で魚を取っていた。この頃は、「人型」ではなく、竜の姿で過ごしていた。

竜といっても、赤い鱗をした小ぶりな西洋竜で、村の人に抱きかかえられる位の大きさだった。

懐かしんでいると、「僕」が川から上がってきた。

川辺に置いてあった、魚を入れたカゴを掴み文字通り「飛んで帰る」。

子供でも竜、力持ちだった。

一瞬、暗転が入り場面が、村に変わる。

村には様々な「人」がいた。

獣が二足歩行した様な人。

爬虫類が二足歩行した様な人。

鳥類が二足歩行した様な人。

そして、一部を除いて毛が無い人。

例えば、少し前から異変はあった。

「毛無し」と他の人達の間で争いが多くなっていた。

あの頃にはすでに、「教え」が伝わっていたのだろう。

そんな事も知らずに「僕」は村の人に挨拶をしながら、山にある家に帰っていった。

始まりの悪夢 その二

暗転、そして場面は洞窟にうつる。

山腹にある開けた空間、目の前には別れ道がありそれぞれ、母の居る湖と父の居る宝物庫に繋がっている。

「僕」が鳴き声を発すると奥から「二人」がやって来た。

母は東洋龍の姿をした人で、父は西洋竜の姿をした人だ。

本来の姿だとこの空間に入り切らないので、「人型」をとっている。

毎日、こうして「二人」と「一匹」で魚を分けて食べていた。

カゴの中には十匹の魚が入っていたはずだ。

父と母に三匹づつ、「僕」が四匹。

父は口の中で魚を焼いてから丸呑みに、母は生のまま丸呑みに、

「僕」は、細かく噛みちぎりながら食べる。

食事を終えると、母は湖に帰ってゆく。

父は、「僕」に竜の力の使い方と知恵を教える。

真剣に聴いている「僕」の隣で「俺」は父をみる。

あの日は、竜の泪について教えられた。

家督を継ぐ者が両親から受け取る力の塊。

血や脂だけでも不死身になれるのだから、その力は推して知るべしだろう。

ただ、一人前と認められなければ意味は無いが。

座学の次は実技訓練、外に出て高く飛ぶ訓練や、火を吐く訓練を日が暮れるまで行った。

そして夜、母の湖で寝物語を聞きながら眠りについた。

何時もならば……。

洞窟に音が響く。

剣戟と罵声と咆哮と、様々な音。

一体何が起きたのか、理解できない「僕」は、音の方へと進む。
何が起きたのか、知っている「俺」は、目を閉じた。

目を開くと場面は、開けた場所に変わっている。

そこに居るのは、松明と武器を持った「毛無し」達。

そして、傷だらけになって横たわった父の遺体。

「僕」は、目の前の光景が信じられないのか呆然としていた。

そんな「僕」を見て近づいてくる「毛無し」達。その口からは、
「売る」や「調教する」等の言葉が漏れる。

「僕」は、怖くなって湖に逃げ出した。

それを見て「俺」は、「毛無し」達の前に立ちはだかるも所詮夢、
「俺」の身体を通り抜けて「毛無し」は奥へと進んでいった。

聞こえてくる母の断末魔。

「俺」は、己の無力を嘆きながら夢から覚めた。

旅立ちの日

あの日、母から泪を受け取り

湖底に母が開けた穴から川へと抜けてそのまま海へとながされた。

気がつけば、島国に流れつき

そこに住んでいる龍の世話になった。

それから十年、龍から生きていく為に必要な知識と力の使い方を教わり。

ロキという、手品師から資金稼ぎの術としての手品と、旅に必要な事を教わった。

そして今日、十六になる俺は一人前とみなされる。

もう、準備は出来ている。

「毛無し」が両親を殺した理由も分かっている。

後はもう旅立つのみ。

世話になった龍には、昨日の内に挨拶はすませた。

できればロキ師匠にも挨拶をしておきたかったが、留守だった。

元服の後に、もう一度いつてみることにしよう。会えなければ、諦めよう。

身支度を済ませ、そう考えた。

一応、晴れ舞台なので姿見で入念に確認する。

映るのは、竜人。

赤い鱗は、光沢を持ち健康的である。

角も滑らかでヒビ一つ入っていない。

服は、おろしたてだ。

「大丈夫そうだな」

確認を終え、いままで世話になった家をでる。

もう、戻ることも無いだろう。

旅立ちの日 昼

元服、一人前の存在になった事を祝う儀式。

そして、龍や竜にとつては、泪を受け継ぐ儀式でもある。

通常ならば、両親から祝詞を受ける事で一人前として認められ泪を飲み込む事で終了するのだが。

「やはり、駄目だったか」

黄色の鱗をした龍人の翁が呟いた。

「育ての親なんぞでは無く、泪自体に認められなければならぬようじゃ」

翁はふう、と溜息をつき俺に告げた。

「母さんは、俺を認めてはくれないのだな」

少し俯き呟いた俺に翁は言う。

「当たり前じゃ、復讐なんぞに囚われおつて。そんなことだから何時までも、邪炎しか吐けんのじゃ」

分かつてはいる。復讐を母が喜ばないことも、父のような完全な炎が吐けないことも。

悔しくて齒を食いしばる。

「分かつてはいるようじゃな」

「ああ、分かっているとも」

翁の目を射抜くように睨む。

分かつていても、諦めることは出来ない。

そんな決意を伝えるために。

「……しようながあるまい、好きにすればよかろう。僕はもう知らん」

そう言つて、翁は背を向けた。

「いままで、世話になった」

その背に礼を言い、立ち去ろうとした。

「そういえば、主の母は水龍であつたな」
足を止める。

「陽である男が陰である水を呑むには、女心を知るのが近道かもしれないな」

翁の独白が終わった。

「恩にきる」

今度は、立ち止まることもなく歩いた。

残された翁は一人愚痴をこぼす。

「小僧が、己のことを二の次にしておつてからに。」

「頼むからこの翁より先に死ぬなよ」

旅立ちの日 夕方 その一

元服を不完全ながら終え、今は恩師ロキの下に向かうために村を歩いている。

旅芸人であった彼のことで、もしかすれば女心を知っているかもしれない。

ただ、留守の可能性もある。
居るといいのだが。

「おや、坊やじゃないか」
声をかけられた。向いて見ると。

「二日振りだね」

「そうですね、師匠」

恩師ロキが居た。

手には何かを包んだ風呂敷を持っている。

「今、知り合いが来ていてね」

「丁度、君のことを紹介しようと思っていたところだ」
付いて来たまえ、と言ってロキは進んでいった。

用がある以上、付いていくしかない。

溜息を一つ吐き、師の後を追った。

「お待たせ、いま帰ったよ」

「お邪魔します」

師に次いで家に入る。

「あつ、これ持って客間に行ってくれ」

師は俺に風呂敷を渡すと外に行ってしまった。

仕方がないので土間で履物を脱ぎ、客間に向かう。

師匠会心の庭が眺める客間、襖を開くと、そこには簀巻きにされた灰色の狼男とそれを眺める麒麟の少女が居た。

二人がこちらを見る。

俺は風呂敷を置いて、部屋の座布団を一つ敷き、そこに座る。誰も喋らない。

特にする事も無いので、二人を見る。

簀巻きにされている狼男はどうやら口吻も縛られているようだ。何かを訴えるような目でこちらを見ているが、俺にはわからない。麒麟の少女は、本当にただこちらを見ているだけだ。

焦点は合っているが興味は無い、と言わんばかりの瞳を向けている。

これ以上、得る物は無さそうなので庭を眺めると。

「あつ、見つかつちゃった」

師匠がいた。

「バレちゃ、しょうがないや」

そう言つて、庭から客間に上がる師匠。

「それじゃあ、紹介するね」

こちらに掌を返して向け「彼が竜牙君」

そして、あちらに掌を返して向けて「簀巻きになつてゐる彼は狼牙君。麒麟の彼女は麟ちゃん」と紹介した。

「大主 竜牙です。師がいつもお世話になってます」
そう挨拶をする。

「ところで、竜牙君。気になる事は無い？」

師が問いかける、しかし。

「いえ、特にはありません」

「……簀巻きになつてゐる彼を見ても？」

「何か狼藉を働いたから、こうなつたのでは」

一瞬、男いや狼牙のショックを受けたように尻尾が立ったが、まさか。

師を見ると、高々と看板を掲げていた。

書かれている文字は。

「ドッキリ、大成功！」

確認と同時に俺は狼牙を簀巻きから解放した。

「大丈夫か」

抱き起こし、口吻の紐を外して問う。

「うう、何とか……」

酷く憔悴しているようだが命に別条はなさそうだ。

「いや、手品や戦い、旅の仕方は及第点だけど、悪戯に関して
は落第だね」

僕も甘いなあ、と師はぼやく。

「あんな悪質な物は、悪戯の範疇にあるわけがない」
文句を垂れると。

「残念、僕の故郷じゃ範疇です」

返され、埒が明かない。

俺は、今日中に旅に出れるのだろうか？
思いもよらない騒動に頭をなやませた。

旅立ちの日 夕方 その二（前書き）

これから、視点変更があります。

行間が多く空いたら視点が変わったものとして下さい。

旅立ちの日　夕方　その二

このままでは、埒が明かない。

師の悪戯好きとストッパーのいないこの状況では狼牙と共に弄ばれる。

過去の修行と称した悪戯とその加減の無さから確信する。

今を除いて話をする機会はない。

「師匠、少しお聞きしたい事があるのですが」

壁に看板を立てかけている師に、はなしかける。

「うん、何かな？」

「女心を知るには、どうすればよいのでしょうか？」

抱えられていた狼牙が吹き出した。

「汚いじゃないか」

「すみません、ですが何故女心を知りたいのですか？」

「ああ、そこからか」

事情が分からなければ確かに可笑しな発言だ。

「それじゃあ、事情をつてオイ師匠は何処に」

何時の間にか師が客間から居なくなっていた。

「多分、女心を知るための道具を取りにいったんでしょね」

衣装とか化粧とか、狼牙が予想を言う。

「ご愁傷さまです」

「大丈夫、君の分もあるから」

俺に慰めの言葉を投げかける狼牙に突然後ろに現れた師が絶望の言葉を贈る。

勿論、手には女物の着物と化粧箱を持っている。

「師匠、説明不足だった。俺の事情を聞いてくれないか？」

「ああ、お母さんの泪が馴染まない事でしょ。知ってるから別にしなくていいよ」

そう言つて、こちらに詰め寄る師。

「なら、こんな事をする必要は無いだろう」

「必要があるからするんじゃない。したいからするんだ!」

衣装を差し出す師、それを手に取るのを渋る俺の肩に狼牙が手を置いた。

「諦めましょう。こうなったら手を付けられません。お急ぎの様ですし、さつさと済ませるが吉です」

私も手伝いますから、そう言つと狼牙は衣装を一つ手に取り客間を出た。

「これを着るのか」

持っているのは、黒い浴衣に牡丹が描かれた女物。

確かに赤い鱗は映えるだろうが……。

「敵つい、俺の顔じゃあな」

まあ、気にしてもしょうがあるまい。

さつさと着替えを済ませるか。

「うう、どうして毎回こうなるんでしょうか」

ロキさんに関わると碌な事にならない。

ああ、過去に戻るならあの時の私を殴りたい。

あの時、協力して貰うために何でも言う事を聞くといい約束をした私を。

「まあ、随分と助かりましたけど」

まさか、こんな事を頼まれるだなんて。

「不確定が現れた。その退治を手伝えなんて」

この世界に現れる筈の無かった教団。

その教祖と黒幕の調査及び撃退、それが頼まれ事。

そして、その鍵を握るのが……。

「彼、大主 竜牙」

本来なら、二十まで親元で育てられ、その後両親の泪を受け継ぎ世界を回る。両親の過去を知り、対立していた竜と龍の架け橋として尽力したり様々な種族間の対立を解決していき最後には統一。

そして……。

「千年王国を造る」

理想的な世界として創られた。

しかし、不確定によって妨げられた。

「この世界外からの介入である不確定。一体誰がなんの目的で」
思案しても何も浮かばない。

赤い色に桜の模様をした浴衣を着た私は、客間に戻ることにした。

「おい、これで良いのか」

「うん、とても似合ってるよ」

不機嫌そうな声をする竜牙君に僕は褒め言葉を贈る。

恥ずかしさからか睨んできた。

まあ、そんなところが弄りがいがあるんだけどね。

竜牙君をからかっていると、再び襖が開く音がした。

「これで宜しいでしょうか」

「うん、とても似合ってるよ」

ありがとうございます、と言って口元を隠して笑う狼牙君。

白に限りなく近いグレーの毛、長い鬘は後ろで軽く縛り一つに纏めて垂らしてある。彼自身が醸し出す空気も柔らかくなんと言うか。

「お母さん？」

近くにいた麟が言う。

そう、母親の様だ。

「今だけは、それで構わないですよ」

そう言つて、麟の頭を撫でる彼は本当に母親にしか見えなくて。

「からかえない」

ちつとも面白くない。

しょうがないから竜牙君をからかおう。

見てみれば、物欲しげな目をして狼牙君達を見ている。

「母さん……」

こっちはシリアスか。

「ハイハイ、もう良いよ。さつさと本題入ろう」

面白く無くなった僕は話を進める事にした。

旅立ちの日 夕方 その三（前書き）

旅立ちの日　夕方　その三

「はい、とりあえず現状の確認をします」

パンパン、と手を鳴らし師が言う。

「十年前に、教団によって両親を亡くした竜牙君。当時六歳、幼心に教団への復讐を誓いこの島国『倭』に漂着ここに住む龍「大主黄牙」に保護される」

「それから、三年後に僕に弟子入りし修行とイジメと悪戯を受ける。そして現在、元服を済ませたものの、母親の泪が定着しなかった。ここまではいいね」

「ああ、翁の言うことには、水は陰だから女心を知ればいいのでは。と言われた」

そう言うつと、狼牙は合点がいったようだ。

「それで僕のところへ挨拶ついでに聞きにきた」

「その通りだ。それで、知っているのか？」

「心当たりはある」

「教えてもらえないだろうか？」

「構わないけど、条件がある」

師が真剣な表情を言う。

「この旅には、狼牙君と麟ちゃんを連れて行きなさい」

「どうしてだ」

「僕としても、教団は邪魔だからね。訳有つて僕は動けないから、彼らに頼む事にしたんだ」

「俺に着いていかせる必要は、無いだろう。他人の面倒までは見れん」

危険な旅になる事は確実だ。

「大丈夫さ、彼らは僕のお墨付き。戦力としても充分だし、悪い話してじゃ無いでしょ」

そう言うつて、師が笑いかけてくる。

「この条件が飲めないのなら、教える事はできない」
詰みの一言。

「分かりました、二人を連れていきます」
師は頷き。

「結構、それじゃ竜牙君、出雲に行きなさい。そこに居る、天照大神と言う神が助けになってくれるだろう」
と教えてくれた。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。二人の用意も出来てるから、着替えたら行きなさい」

三人とも仲良くね。と言って師は客間から出て行った。

「多少、不満もあるでしょうがよろしくお願いいたします」

「いたします」

「いや、こちらこそ世話になる」

旅立ちの日 夜

「とりあえず、自己紹介しませんか？」

狼牙がそう言ったのは、村を出て野営をしている時だった。

「必要か？」

「どれ位の付き合いになるかも分かりませんし、お互い何ができるのか知っておいた方が良いでしょうから」

寝ている麟を撫でながらそう言う。

「そうだな、幾らかは知っていた方が良いか」

「ええ、それでは改めまして。大神 狼牙 と言います。

ロキさんの元弟子です。

年は、十六で同じ年になりますね」

と和やかに笑いかけてくる。

「出身は、山にある村でして涼しいところなんです」

「そうか、ところでその子は」

「ああ、麟はロキさんが連れていた孤児で私の家で引き取ったんです。

人見知りなのですが、私には懐いてまして着いてきてしまってます……。

旅は危険なので出雲にある叔母の家に預ける事にしてます」

少し寂しさを滲ませる表情をして言う。

「ロキさんは、離れない方が良いと言われましたがコレばかりは聞けません」

「そうだな、師匠も無茶を言う」

「ええ、本当に」

二人ため息を吐く。

「ところで、出来る事は何があるんだ」

「ああ、忘れてました。

私は、毛無しへの変身魔法と念動力を少しだけ。

武器は、双剣とジャマダハルです。

そちらは？」

「俺は、同じく毛無しへの変身魔法と火が吹ける位だ。
得物は、大鎌だな。

話すことはもう無いか？」

狼牙に聞く。

「ええ、今のところ」

「そうか、なら寝ている。

見張りは俺がやる」

「それでは、お言葉に甘えて」

簡易の天幕に鱗を抱えて入って行く狼牙を見送る。

月夜に一人、焚き火の音を聴きながら佇む。

出雲には、およそ一週間で着けるだろう。

仇討ちの旅、その旅立ちの日はこうして終わった。

旅立ちの日 夜（後書き）

次は、裏話です。

裏話 旅立ちの日 前日 狼牙

裏話 旅立ちの日 前日 狼牙

私は、捨て子だったそうです。

気づいた時には保育園、園長家族に引き取られていた。

家族には良くしてもらったし、友人も沢山いた。

ロキさんは義兄の悪戯の師匠で間接的にも直接的にも被害にあった。

高校は家族の勧めから寮のある高校に行く事になりました。

友人や家族と離れるのは辛いですが一人暮らしとゆう、新しい環境への期待も有ったのです。

まあ、直ぐに壊れたんですけどね。

住んでた所は神様の世界だった事が発覚したり、家族や知人が神様だったり、友人ができたり、謎の組織と戦ったり、アカシックレコード（世界図書館）の所為で世界が崩壊しかけたりと色々ありました。

あの日の私は、その世界崩壊の危機（俗に図書館事件と呼ばれる）を友人と共に乗り切り。

やっと平穏な生活を謳歌する事が出来る筈でした。

しかし……。

「ねえ、頼みごと聞いてくれるんでしょ」

こちらを覗き込むように見るロキさんが目の前にいる。

「嫌な予感しかないのですが」

また、大事に巻き込まれる気がする。

「実は、僕の管理世界にも予想外の事が起きちゃって……解決お願いね」

彼は舌をだして頭を小突くとゆう茶目っ気のある態度で頼んでき

ました。

「ロキさん、貴方は神様でしょう。」

自分の事くらい自分でなさってください」

「そうしたいのは山々なんだけどねえ……」

彼は少し困ったような顔をして言う。

「何か問題があるのですか？」

「そうなんだ」

それだけを言っ、彼は口を閉ざした。

言えないような問題なのだろう、あくまでも人である私には……。

その気遣いは嬉しくもあるが哀しくもある。

しかし、

「分かりました、引受けます」

「ありがとう、狼牙君」

きつといつの日か、彼らに恩を変えしてみせる。

「それじゃあ、依頼の内容なんだけど……」

その為にもまずは、この依頼をこなしてみせる。

一週間の道のり 一日目

「私に勝てると思ってましたか？」

倒れ伏す俺の目の前に灰色の毛に覆われた足が見える。

何故、こんな事になったのか？

その答えを探す為に目を閉じる。

「もう、ダウンですか？張り合いがありませんね」

トドメです。その言葉が聞こえると同時に衝撃が襲い。

そこで、意識が途切れた。

「……さん、起きて……さい。……牙さん、起きてください。竜
牙さん、起きてください」

「……ハッ？」

突然、起こされたために驚き声を上げる。

目の前には、灰色の狼の顔をした獣人、狼牙だ。

起き上がり、辺りを見渡すと、登る朝日と焚き火の燃えかす。それから、天幕があった。

「俺は、……眠っていたのか」

「ええ、ぐっすりと」

可愛らしい物を見たような口調で狼牙は言う。

「仕方ありませんよ、昨日は色々あったでしょうから。初めての旅は疲れるものです」

「……そうだな、旅に出たのは昨日だった」

なんと無く違和感はあるが、旅に出たのは『昨日』だ。

「どうかしましたか？」

悩んでいるのが顔に出たのだろう、狼牙が聞いてきた。
「いや、少し寝ぼけているようだ」

「なら、いいです。」

私は鱗を起こしてきます」

天幕に向かつて行く狼牙、それを見て俺は、『何時もの光景』だ
と思った。

『何時もの光景』それに対して疑問を持つが……。

「既視感だろう」

母に起こされていた自分と狼牙に起こされる鱗の姿を重ねただけ

……そう判断した。

思考を終えると、天幕から二人が出て来た。

鱗が俺の顔を見つめる。

「何か、俺の顔についてるのか？」

「……、おはよう」

そう言つと顔を逸らし黙ってしまった。

「鱗は、恥ずかしがり屋なんです。」

許してあげて下さい」

俺の顔が不機嫌に見えたのか、狼牙がそう言ってきた。

「そこまで、狭量では無い。とりあえず、おはよう、二人共」

「ええ、おはようございます」

和やかに返す狼牙、しかし依然として鱗は、こちらを見ない。

「まあ、いい。出発するから天幕を片付けてくれ」

「はい、少しお待ち下さい」

天幕に近づき、触れる。

すると、天幕は泥の様に溶け、丸い真珠のような石に変わった。

「……師匠も凄い物をくれたものだ」

「まったくです、無機物なら何にでもなれる月の石なんて物を何
処で手に入れたんだか……」

呆れた様に言う狼牙、その手には真珠の様に、白く丸い石がある。
月の石と呼ばれるそれは、無機物限定だが想像した形に変化する
能力を持つ、他にも機能があるらしいが……。

俺は、知らない。

「片付けも済んだ、さつさと行くぞ」

俺は、二人に背を向けて歩き出す。

そこに狼牙が質問する。

「朝ご飯は、どうなさるんですか？」

「干し肉でも食べればいい」

そう返す。

後ろからため息が聞こえたが気にする必要はあるまい。

それから、数時間歩き続けると海が見え始めた。

「アレは、もしかして海ですか？」

「ああ、見えないが向こうに本州とやらがある。近くには港と村がある場合によってはそこに泊まる事になるかもしれん」

「食料を買ってもかまいませんね。干し肉だけでなく、果物も欲しいですから」

「好きにしろ」

どうも、食料が干し肉だけだったのが気に入らなかったようだ。

狼牙は不機嫌そうにそう言うてきた。

干し肉は美味しいのに……。

港付近の村は、大陸と本州その両方と交流がある。

つまり……。

「最悪だな」

村の様子がわかる位に近づいた事でわかった。

木造で平たい構造をした建物の中、レンガによって作られた背の

高い『教会』はよく目立った。

「おい、狼牙。ここで化けとくぞ」

「どうしたんです？」

「既に教会が建っている。此処はすでに敵地だ」

その言葉で気づいたのだろう、少し驚いたようだ。

「わかりました。麟、急いで化けましよう」

そう言つて、人間に化けた。

「これでいいですね」

肩まで伸びた黒髪を後ろで纏めた眼鏡を掛けた優男が言う。

「……優男だな」

思わず口を滑らしてしまった。

「なつ、失礼ですね。つと、それより麟も……大丈夫そうですね」

狼牙は、文句を言つた後に自身の隣に居る麟をみる。

麟は、既に背中にかかる位に長い黒髪の少女に化けている。

何処か遠くを見ている様な瞳と整つた容姿が人形を彷彿させた。

「……なあ、こいつ本当に生きてんのか」

「本当に失礼な人ですね、貴方も早く化けなさいよ。笑つてやり
ますから」

余りにも生氣を感じない麟に、俺はまたもや口を滑らしてしまつ
たところ狼牙に怒られた。

それに驚き慌てて化ける。

化けた俺の姿を見た狼牙は。

「チツ」

と舌打ちをした。

「その、なんだ、二人共、失礼な事を言つてすまない」

二人に謝るも狼牙は不機嫌なままブツブツと呟いたまま麟は相変
わらず無表情。

「リア充、爆発すればいいのに」

「何だそのリア充つてのは？」

狼牙の呟きに対する質問をすると。

「何でもありません」

と言つて麟を連れて村に歩いていった。

「ちよつと待て、置いてくんじゃ無い」

俺は急いで二人について行く。

村に入ると教会の鐘が鳴り始め、毛無し達が何処かへと歩きだした。

「着いていつてみましょう」

「ああ」

目的地が近いのだろう、段々と人が多くなってきた。

しかし、移動中にも村には毛無し以外の人間は見れない。

「どうも、教会に向かつてるようですね」

「何かあるのか？」

「私は、主日礼拝しか知りませんよ」

「主日礼拝？なんだそれは」

「日曜日にする主の言葉を説き明かす行事です」

「そんな事の為に集まるのか、信者は」

「宗教と言うのは大体そうです。それより、着きましたよ」

何時の間にか、毛無し達の足は教会の前にある広場で止まっていた。

「これから、何が起こるんだ？」

「さあ、日曜日では無いから主日礼拝では無さそうですが……」

周りの毛無しは全員、教会の扉を見ている。

その扉が開き始めた。

そこから現れたのは、司祭の姿をした肥満体の男。

「……まんまですね」

「ああ、絶対に食わない事を言うだろうな……」

「お願いですから、暴れるのだけは止めて下さいよ」

目配せして俺に釘を刺す狼牙。

「善処はする。話出すようだぞ」

司祭が口を開く

「皆さん、主は仰りました。

この世界は、我等、人のためにあると

我等に仕える者として他の者は存在すると

我等こそが真に愛された者だと

皆さん、今まで我等は偽りの神の所為で力を無くしておりました。ですが、真の神がとうとう、救世主様を遣わして下さいました。

救世主様は、奇跡を起こし、我等に力を戻されたのです。

そして今、我等は真の世界を取り戻す為に戦っているのです」

「世界は、我等、人の為だけに……真の世界、理想郷、亜人も獣も鳥も魚も竜すらも我等、人の為だけに……存在するのです」

司祭の口はまだ動いている。

けれど、俺の耳には聞こえない。

アレの声は聞こえない。

周りの毛無しの歓声も、狼牙の制止も……。

全身に力を入れると、赤い鱗が浮き出す。

人型が崩れて行く音と共に視界が高なる。

爬虫類の顔と長い首、腹以外を鱗に覆われた胴体、背中から生える皮膜の羽

太く逞しい足と腕、位を表すその指は四本。

ヒュールルルルオオーン。

変化を終えた俺は、吠えた。

「な、何故、竜がここに……」

司祭が怯えた声をだす。

「ヨケロヨ」

口に可燃性の液を為吹き出す、そして、前歯を合わせる。

「カチッ」

火花を散らす。

吹き出した液に引火し、黒い炎が辺り一面を焼いた。

「ああ、熱い？」

「ひい、服が燃えちまつた？」

「髪が、アタシの髪が……」

突然の事に混乱する毛無し達。

信者には、まだ甘いだろう。

更なる苦痛を与える為には……。

「カミ、トヤラガイルノナラ、キヨウカイハ、モエヌヨナ」
毛無しに聞こえるように言う。

「まさか……止める！」

「そんな事は許されん！」

「天罰が下るぞ？」

「カミ、ナド、オラヌヨ」

空に羽ばたき、教会の上空から液を吹き出し……。

「カチッ」

爆発。

辺りに煙が広がり、教会を隠す。

俺は、煙を晴らすために勢いよく羽ばたく。

そこには……。

「……ヤハリ、カミ、ハ、イナイ」

崩れ落ち、瓦礫と化した教会があった。

放心する毛無し達。

俺は、教会だった瓦礫の上に着地する。

「ムナクソガワルイ、ヨテイトカワルガ、フタリトモ、ノレ、ス

ゲニ、ココラデル」

「……仕方ないですね、いきますよ」

村の方から狼と麒麟の獣人が現れ俺に乗る。

「くっ、直ぐにでも本部に連絡を……」

司祭が港に走り出した。

「オチルナヨ」

「それは、どういう……ウワァ！」

二人にそれだけを伝え、飛び立ち港に向かう。

貿易船や漁船が纏められているそこに、液を吹きかけて……。

「カチッ」

爆破。

そのまま本州を目指す。

「コレデ、イクラカ、ジカンハ、カセゲル」

「うう、落ちるかと思いました」

「スマナイナ、スコシ、イソイダ」

狼牙に一応謝る。

「かまいません。それより、このまま出雲まで行けませんか？」

「ワルイガ、コノスガタハ、フヨウニ、ケイカイ、サレル。ホ
ンシュウニ、ツイタラ、トクゾ」

そう返す。

「仕方ありませんね。樂ができると思ったのですが」

「ヨノナカ、ラクニハイカナイ、モノダ」

「そうですね」

軽口を叩きながら空を飛ぶ。

「麟、あまり身を乗り出してはいけませんよ」

「……綺麗」

「ハンコクホドデ、ツク。ゾンブンニ、タノシムト、イイ」

眼下に広がる海原、麟はこの景色を気に入ったようだ。

「もう、昼を過ぎたようですね」

東寄りになった太陽を見た、狼牙が言う。

「アノ、ムラノコトラ、カンガエルト、アチラノミナトモ、キケ
ンダ」

「もしかして、今日も野宿ですか？」

港付近の危険性を説くと狼牙がそう聞いてきた。

「キタイハ、デキン」

それを聞くと狼牙は、がっかりした声音で「そうですか」と言っ
て黙ってしまった。

結局、この日は港付近の村に教会を見つけた為に野宿となった。

一週間の道のり 二日目（前書き）

幼児退行及びB・L注意報発令

一週間の道のり 二日目

俺は、燃える村を背景に灰色の狼女と対峙している。

灰色と言っても、黒に近い灰色で、狼牙の白に近い灰色とは別物だ。

しかし……。

「何故、こんな事をしたんだ ● ● ?」

「貴方に愛して欲しいから」

「起き……さい。 りゅ……ん、起きて……さい。 竜牙さん、起きて下さい」

体を揺すられて、目を覚ます。

目の前には、白に近い灰色の毛をした狼の顔。

「おはよう、狼牙」

とりあえず、挨拶をする。

「おはようございます、竜牙さん。」

うなされていましたが大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「それなら良いのですが」

そう言つて天幕から出て行く狼牙。

どうも俺はうなされていたらしい。

確かに、決して良い夢とは言えないが……。

あれは、誰なんだ？

昨日の夢に繋がるようだがわからない。

記憶には、心当たりは無い。

この辺りでは狼人間、自体が珍しい。

彼等は、本州と蝦夷を流浪する民だ。

灰色狼人間の亜種が本州を、蝦夷狼人間が蝦夷を流浪している。

四国や、俺の居た九州では、流浪するには狭いのだから。

「所詮、夢か……」

幾ら考えても答えは出無い、ならば夢と割り切り忘れるべきだろう。

「竜牙さん、早く出てきて下さい。朝ご飯できてますから」
狼牙に声を掛けられた。

少し時間をかけ過ぎたようだ。

「すまない、すぐに行く」

横になつていたために、少し乱れた衣服を直し天幕からでる。

「……朝ご飯か」

肉を焼いたのだろうか？

香ばしい匂いが辺りに漂っている。

鉄板の上に、肉と野菜が入った薄いパンの様な物が三枚あった。

「意外とできるもんですね。お好み焼き」

「これは、お好み焼きと言うのか」

「ええ、小麦粉を水に溶いた物の中に具材を入れて焼くだけなんです
簡単に出来るんですよ」

なるほど、肉と野菜だけで無く、炭水化物も一品で補える。

調理も簡単と素晴らしい食品だ。

しかし……。

「材料は何処からもってきた」

「いやですねえ、あの村からに決まってるじゃないですか」

「あの時、村には毛無ししかないない。」

そして、その毛無しも殆ど教会前にいた」

狼牙を見るとこちらから目を反らした。

「だ、大丈夫ですよ。お金は置いてきましたから……、ですから、その、そんなに睨まないで下さい」

どうも、萎縮したようだ。

「まあ、今回は俺が暴れたせいもあるからな。強くは言えないが、もうやるなよ」

「……わかりました」

沈んでしまった狼牙を見て少し、罪悪感を持った。

「あゝ、でも食事は、助かる。俺は、料理なんて出来ないからな。保存食ばかりになると思ってたからさ、干し肉しか持ってなかったし。……ありがとう」

慰めの言葉をかけると顔を上げて笑顔になる。

「いえ、そんな、お礼だなんて……。どうか、それは、食べてからお願いします」

そう言つて、鉄板をお好み焼き毎に三枚に千切り、皿に変化させた。

「はい、お口に合うと良いのですが」

お好み焼きを載せた皿を差し出してきた。

それを 受け取る。

なんと、皿は鉄ではなく陶器製の物になっていた。

「……便利だな、月の石」

使いこなせば、架空の物質も再現できるかもしれない。

「あつ、お箸を忘れてました。今、出しますね」

狼牙が今度は、自分の皿から摘み取った粒を箸に変える。

食器に不自由する事はなさそうだな。そんな事を思いながら箸を受け取る。

麟にも箸を渡した狼牙が手を合わせる。俺と麟もそれに合わせ

て。
「……いただきます」

食事を始めた。

初めて食べるお好み焼き、匂いからして美味そうだったが……矢

張り美味かった。

「美味いぞ、狼牙」

「ありがとうございます、お口に合っただけによいです」
ふむん、機嫌は、直ったようだ。

狼牙は、心底嬉しそうな顔をしている。

麟は……。

「麟も喜んでくれてなによいです」

「あれは、喜んでるのか」

相変わらず、無表情にしか見えない。

その後は、箸も進みお好み焼きは直ぐに無くなってしまった。

「ご馳走様」

「はい、お粗末さまでした。食器は、そのまま結構ですから食
休みでもして下さい」

「そうさせてもらうよ、出発できるようになったら教えてくれ」

「わかりました」

俺は、天幕に戻ることにした。

声をかけられるまで、月の石に慣れる為の訓練に使うためには、
狼牙の提案は丁度良かった。

天幕の中、見よう見真似でやってみたところ……天幕は見事に倒
壊した。

「勢いで骨組みを砕いたのがトドメだな」
倒壊の原因を考えていると。

「何をなさってるんですか」

狼牙から声をかけられた。

「いや、少しは月の石に慣れようかと」

「言つてくだされば、付き合いましたのに……」

呆れたような声音で言われ、きまりがわるくなる。

「麟の食事も終わりましたから、近くの村まで行きましょう。

そこで、指導しますから」

「ああ、よろしく願います」

「では、出発の準備を」

狼牙が、皿と箸をまとめるとそれ等は、崩れていき。跡には、白い真珠のような月の石だけが残された。

俺が天幕に触ると天幕は泥のように崩れてゆき、月の石が残された。

俺達三人は、次の村を目指して歩きだす。

「次の村までどれくらいかかるでしょうか？」

「大体、二刻程だな」

「着く頃には、昼時ですね」

「教会が無ければな」

着くには着くのだが教会があれば近づきたくない。

「……その時は、物資の補給だけしてきます」

「俺は、村の外で待ってるよ」

他愛ない会話をしながら……。

一刻半程過ぎた頃、道の先に村が見え始めた。

「……教会は、無さそうだな」

見えるのは、木造建築ばかりで、レンガ造りの教会は見当たらない。

「今日は、野宿しないで済みそうですね」

「そうだな」

そのまま半刻歩いて村の中、毛無し以外の人間もいるのだが……。

「雰囲気が悪い」

「ええ、まったくです」

毛無しと他の人間との関係がぎすぎすとしている。

教団と関係があるかもしれない。

「情報が無い事には何も進みまない。宿をとり次第、情報を集めるぞ」

俺は、情報収集を提案する。

「仕方ないですよ。指導は宿でもできますし、日中は情報集めに当てましょう」

狼牙も賛成のようだ。

「……」

「麟も賛成だそうです」

「そうか」

まずは、宿屋を探す事にした。

「旅人相手の商売だ。多分、この辺りにもある筈………見つかったぞ」

少し辺りを見回しただけで見つけた。

飯屋も商っているようで情報も手に入りそうだ。

「存外、楽に済みそうですね」

「教団が絡んで無ければな」

中に入ると、喧騒が耳に入ってきた。

取っ組み合ってる毛無しの男と猫人の男、それを止めようとしてる周りの人々。

その騒ぎを避けて進み俺は、帳場にいる毛無しの女将に聞く。

「この騒ぎは何だ？」

「いらつしゃい。この騒ぎはねえ、毛無しが発端でね。奴さん、

あの莫迦げた宗教を鵜呑みにしてんのさ」

「それで」

「その宗教に港の村から追い出されたあの猫人が、奴さんがあた

しに宣教してんのを聞いて怒り心頭」

「今に至ると」

「そのとおり」

「そうか、部屋を借りたい」

「何人だい？」

「三人だ」

「飯付きなら銀貨三枚 飯無しなら銀貨一枚と銅貨五十枚」

「高くないか」

「飯付きは、ここでの食事が無料さ」

「それなら飯付きで頼む」

銀貨三枚を渡す。

「毎度あり、部屋は奥の間以外なら好きな所を使いな」

女将は、商売用の笑顔でそう返してきた。

「一部屋借りるよ」

俺は、狼牙達を呼び飯屋の奥にある部屋の一つに入る。

騒ぎは、何時の間にか収まっていた。

「……成る程、教会は無くても教えは広まっているようですか」

座敷に入り、先程、女将から聞いた話を狼牙達に聞かせたとこ
ろ、そう返してきた。

「宣教士が誰か分かれば楽なんだがな」

「港の村に寄らなかつたのは早計だったかもしれないね」

狼牙の言葉に少し、きまりが悪くなる。

「とりあえず、状況を整理しよう」

「そうですね。」

まず、九州の港付近の村には既に毛無ししか、いませんでした」

「次に本州の港付近の村は、教会が有ったことと、先程の騒動を
見る限り教団の支配下にあるだろう」

「そして、この村の様子もオカシイ。調べると教えは既に広まっ
ているようです。それも、雰囲気が悪くなる位には」

「教会が無いところを見るに、まだ宣教は完全では無い」

「つまり、宣教士が来てからそう時間は経っていないようです」

「尻尾位なら掴めそうだな」

「出雲に着くまでに片付けば良いのですが」

三人とも立ち上がり座敷を出る。

「女将、少し出る」

「はいよ、行つてらっしゃい」

女将に声をかけて宿屋を出た。

「何処から行くか」

「広場なんかどうでしょう。彼等は派手好きなようですから」

「そうだな、広場に向おう」

狼牙の提案により、村の中心にある広場を目指す。

はたして、そこには人だかりが合った。

「あっさり見つかったな」

「拍子抜けですね」

皆が和服を着てるなか、ヒドく目立つ襟をした洋服に南瓜パンツを履いた天辺ハゲで中肉中背な毛無しの男が、そこにいた。

「……何処の王子様でしょうか」

「王子の服装は知らんが、宣教士の服装では無いだろうアレは…

…」

二人して、思わず呆れてしまう格好だった。

確かに派手だし華美な服装だ。しかし、心象は最悪である。

「宣教士様！」

「今日も素敵です宣教士様？」

「奇跡を！今日も奇跡をお見せください？」

騒ぐ毛無し達、どうやらアレは宣教士で間違い無いらしい。

「どうです、宣教士とは言え仇の一人を見た気分は……」

「なんというか、アレが仇つてのは釈然としないな。

うん、凄く釈然としない。

きつと、百年の恋が冷める位には釈然としない」

間違いであつて欲しいと思うが、残念ながら現実である。項垂れていると、宣教士がゆつくりと手を挙げた。すると、騒いでいた毛無し達が黙る。

「皆様、暫しの間、静粛に」

見た目に反して重厚な声が広場に響く。

「主は、泥から人間を作られた」

宣教士は地面から土をすくい、それに水をかけた。

「土は、体を作り」

泥をこねる。

「水は、魂となった」

泥を丸める。

「形は、主を模した」

泥を人型にした。

「しかし、刹那に崩れた」

泥が動き歩きます。

「水が土から逃げたからだ」

泥は、見る間にヒビ割れ。

「泥は土くれに還る」

崩れさった。

毛無しが沈黙を破り歓声を挙げる。

「これが奇跡か……」

「違いますよ、あれは魔術です」

俺のつぶやきに狼牙が返してきた。

しかし、俺はそんな魔法を知らない。

「土くれの人形、大陸にはそれを作る魔術があります」

「そうなのか」

「ええ、今のは、簡略してるので直ぐに崩れましたが……」

狼牙が説明をしていると。

「亜人が失礼な事を言っな！」

宣教士が間に入ってきた。

何時の間にか、毛無し達がこちらを睨んでいる。

「これは、神の奇跡だ。魔術などの邪法と同じにするでない？」

「では、やってみせましょうか？」

狼牙は、宣教士を挑発する。

宣教士は観衆の手前、逃げる訳にはいかない。

「やってみろ、できる訳ないがな」

そう言つて 不敵に笑う宣教士。

「本当に大丈夫なのか？」

「まあ、見てて下さい」

観衆の前に進む狼牙、その姿は自信に溢れていた。

「先程の泥人形、材料は単純、土に水それから……髪の毛です」
宣教士の顔が歪む。

「本来なら、神の力を借りる為に紙に神を意味する文字を書くのですが。」

今回は、ほんの数秒動かすだけで良いので個人の一部を使いましてね」

一息吐き、

「土は、体を作り。

水は、魂となった。

形は、主を模した。

しかし、刹那に崩れた。

水が土から逃げたからだ。

泥は、土くれに還る」

宣教士の教えを暗唱した。

「泥を人型にすることで体を固定、神の名の代わりに自身の一部を入れることで、それを魂とした。

主の真似事をするこの術、あなた方にとっては禁忌ではないでしょうか」

そう言つて、狼牙は泥を狼人型の人形にして、

「これを入れれば完成です」

自らの髪の毛を一本引き抜き、観衆に見せつけてから、人形に入れた。

「歩きますよ」

人形を地面に倒して置くと、立ち上がり、歩いた。

「崩れなさい」

その一言で人形は土くれに還った。

観衆は、息を呑んだ。

「あ、悪魔です！」

こいつは、亜人の皮を被った悪魔です！

騙されてはいけません？」

宣教士が叫ぶ、それに対して狼牙は涼しげな顔をして返した。

「これが悪魔の所業なら、貴方のしたことも、主のなさったことも同じですね」

「結論そうだけど。なんか間違ってるじゃないか？」

「今は、悪魔が微笑む時代なんです」

俺のツツコミにフッフと笑いそんなことを言う。

「とにかく、毛無しだけが特別な存在では無いことの証明にはなつたと思うのですが……まだやります」

声音を低くして凄みを持たせて言う。

宣教士は、

「きよ、今日のところは見逃してやる？」

しかし、貴様には何時か天罰が下るぞ？それまで、悔い改めて待っている！」

と甲高い声で叫び、逃げて行った。

「悔い改めたら天罰も何も無いでしょうに」

「まったくだ」

観衆もそれを見て、散り散りになっていった。期待していた分、失望も大きいだろう。

この村が教団に毒されることは当分無いと思われる。

「あつ、捕まえておかないと宣教止まりませんね」

「今更それを言うか」

疲れたので、俺達は、アレを追わずに
宿屋に戻ることにした。

宿屋に戻り、座敷で寛いでいると女将がやって来た。

「お前さん等、あの奇天烈な奴の鼻をあかしたんだってねえ」

「奇天烈な奴……ああ、アレのことか。そいつは、その狼牙が
やったんだ。俺は見てただけさ」

「お前さん等がやったには代わり無いんだろう」

女将は、妙に気分良さげに言う。

「ええ、そうですが。それが何か」

「今、飯屋の方がその話で持ちきりでねえ。

莫迦な宗教を宣教する奇天烈な奴を追いつ出した功労者、港の村か
ら来た奴等が宴会するから来てくれだとき」

ほら、行った。行った。と俺達の背中を押す女将。

そのまま、飯屋に入ると……。

「酒臭いな」

宴会どころか酒盛り状態だ。

狼牙は、隣を座敷に戻して来ると言つて逃げた。

「おう、功労者一行の一人じゃねえか」

「そんなとこにいないで、こっちにこいよ」

猫人と犬人に捕まり、空いている席に着かされる。

何時の間にか手には、酒の入った杯があつた。

「さ、さ、グイッと」

全員がこちらをジッと見ている。

飲むしか無い。

杯を傾け一気に酒をあおった。

途端に起こる歓声と拍手。

「いい呑みっぷりだ」

「竜人ならこんなの水だろう」

「竜だけにウワバミかい、じゃんじゃん呑みな」

杯が空く、酒が注がれる、呑む。

杯が空く、酒が注がれる、呑む。

この繰り返しを経て、最後には……。

「……ぼくだけになっちゃた」

何時の間にか、幼児退行していた。

宿屋の方から音がこちらに近づいてくる。

「竜牙さん、大丈夫ですか？」

狼牙だ。

「だいじょうぶだよ」

「そんな、呂律が回らない状態で言われても。座敷まで戻れますか？」

「うん」

立ち上がり歩こうとするが……。

「ふらふらする」

千鳥足になる。

「世話がやけますね」

狼牙がこちらに近づいてきて、ぼくと肩を組む。

「これなら、大丈夫ですか？」

「うん」

ゆっくりとだが、歩ける。

寝転がっている人を避けながら座敷に向かう。

こんなに酔っているぼくの世話をやく彼はなんだか。

「おかあさんみたい」

「失礼な、せめてお父さんと言って下さい」

「え、りんちゃんのお世話をしているとことかあ、あさげのじゅん
びしてくれるところとかあ、おかあさんにしかみえないよあ」

そして何より、滲み出す気配が母親の物と酷似している。

「ねえ」

そのせいで

「何ですか？」

口を滑らせた。

「おかあさんっていつていい？」

今は亡き母を求める声を出してしまった。

狼牙を見つめる。

彼の目は見開かれている。

「だめなら、だめでいいよ」

逃げようとしたぼくに彼は……。

「構いませんよ」

優しげに微笑んでくれた。

「あつて、みつかだよ？」

「時間が必要ですか」

「ぼく、よつてるんだよ」

「別に、今だけでも構いませんよ」

「おかあさん」

「何ですか？」

座敷の中、狼牙を抱きしめた。

彼は、ぼくの背中をあやすように叩く。

「今まで大変でしたね」

「おじいちゃんもしょうもいたからがんばれたの」

「それでもですよ。あなたは、本当に良く頑張りました」

「まだいっぱいやらなきゃいけないよ」

「私も手伝いますから。安心なさい。さあ、お休みですよ」

「うん」

布団に近づく、ぼくは狼牙から離れて布団に入る。

「子守唄は、いりますか？」

枕元に座る狼牙が言う。

「いない」

「なら、坊やにはおやすみのキスを……」

嘴に触れる柔らかい感触。

温かいなあ。

「おやすみなさい、坊や」

そのまま、ぼくは夢におちた。

一週間の道のり 二日目（後書き）

次の話は、番外です。

この後の狼牙の話です。

おそらく、否定ばかりの展開かもしれませんが。

一週間の道のり 二日目 夜

「やってしまいました」

つい、保育園の子供達を思い出して。

あやすまでは問題無いんです。

問題なのは……。

「おやすみのキスって、ああもう、何してるんですか私？」

寝ている二人を起こさないように静かにされど激しく自分を叱咤する。

「うう、外に出て頭を冷やしましょう、そうしましょう」

宿屋を出る、空には満天の星そして……。

「満月」

村を歩きながら思い出すのは月の石、元々は向こうの神（知人）の作り上げた物。

その能力は、魔法の行使と無機物の生成、それから召喚用の媒体に筋力の増加そして、

「性転換能力」

神曰く、俺のモットーは産めよ育てよ同性愛はナンセンスだ！
な宗教の神様。

同性による性的な干渉があつた場合、強制的に性転換する。

「キスってそれにあたりますか？ 宣教士さん」

「何のことやらさっぱり」

背後の路地から宣教士が現れた。

「同性愛ってどの程度からその判定がくだるのかを教えてくださいませんか？」

「異形のまぐわい等全て悪よ？」

宣教士は重厚な声で叫ぶ。

「善し悪しを聞いてる訳じゃないのですが」

はあ、と肩を竦めて溜息を吐く。

「まあ、それは置いておきましょう」

一息置いて。

「こんな夜分に何の用です」

咎める様に言う。

「知れたこと、貴様に天罰を下しに来たのだ！」

宣教士は、叫ぶ。

「天罰は、主とやらが下すものでしょうに」

「黙れ！ 貴様の相手はこの土くれよ」

宣教士が指を鳴らすと……地鳴りと共に地面から五体の2m程のゴーレムが現れた。

「それだけですか？」

「ハッ、貴様なんぞには過ぎた敵よ」

「試してみます？」

「試すまでも無いわ！ やれ、ゴーレム共」

迫るゴーレム、その速さは人の走りと同じ程度しかない。

「ゴーレムを倒すには、カバラ式の場合、shemと呼ばれる神の名をかたどった文字の書かれた羊皮紙を引き抜けばいい」

「ユダヤ式の場合は、ヘブライ語で真理を表すemethからeを取り死を表すmethにすればいい」

独白をしながらゴーレムの攻撃を避ける。

「そして、二つに共通する点としては……ハアッ」

一体のゴーレムの頭を掌底で穿ち中の羊皮紙を握る。

「どちらも、頭に羊皮紙がある」

取り出した羊皮紙を見るとemethと書いてある。

「やはり、ユダヤ式ですか……」。

この世界にもユダヤ教はあるようですね、安心しました。あなた方の源流が同じであることに」

eを千切り羊皮紙を捨てる。

襲いくるゴーレム、をカウンターで穿ち羊皮紙を握りeを千切る。

瞬く間にゴーレムはいなくなっていた。

「まだやりますか？」

呆然とする宣教士に話かける。

「当たり前だ！ 苦節五年をかけて作り上げた秘密兵器……ジャ
ンボゴーレムがまだ残っている？ 出でよ！」

パチンツ、と指を鳴らす。

「……」

「……」

「……来ませんね」

きまりが悪いのか、顔を赤くする宣教士。

「村の外に出ましょうか？」

「ハイ……」

沈んだ宣教士を連行して村の外に出る。

「この道を進めば港の村に着きます。」

あなたにも家族がいるでしょう……命までは取りません国に帰
りなさい」

そう言つて、宣教士を送り出そうとしたら突然、地震が起きた。

「まさか」

「フハハハハ？ そのまさかよ。」

今の地震は、俺様のゴーレムが港の村にある教会の地下からこ
ちらに向かってくる音よ」

見事な悪役っぷりのセリフ。

しかし、

「そんな、地面にへばりついた状態で言われても……滑稽なだけ
ですよ」

「黙れ！」

今頃、教会は倒壊しているだろう、他ならぬ宣教士の巨大ゴー
レムによって。

「莫迦も極まると厄介ですね」

「莫迦と言ふな！ そして、何故貴様はこの揺れの中立ってい

れる？」

その質問に私は、笑顔で答える。

「なんせ、私は天使ですから」

「は？」

呆然とする宣教士を放っておき、私は月の石を飲み込む。

オリジナルの月の石は、竜牙の持つロキさん印のレプリカと違い
泪と同じ使い方ができる。

端的に言つと、力を大幅に上げることができるのだ。

光が辺りを包みこむ。

空戦用の翼を想像すると背中から生える感触がある。

光が収まると、白い翼を背中から生やした白い雌の狼人がそこに
現れた。

ん？

『雌の狼人』

疑問符を浮かべていると、空から紙が降ってきて顔に被さった。

「何ですコレ」

見てみると、こう書いてある。

『ウルフ君改めウルフちゃんへ

久しぶりです。

この手紙は君が性転換した知らせが届いたので至急作成しました。
アウトラインの設定はB以降でした。

あつ、Bじゃ分からない。

正解は、キスの時点でアウトです。

手を繋ぐまではセーフでした。

そして、嬉しいお知らせです。

今回も例にならつて賭け事の対象になってました。参加者は現在
全員、出雲に居ます。

結果は……俺の一人勝ちです。

大勝の分け前として月の石に組み込めるパーツを天照のお姉さん
に作って貰ったので、受け取りに行ってください。

追伸、その相手とお幸せに

by 園長（神）『

読み終えた途端に破いて捨てた。

「今は、ゴーレムを潰すのが先ですよ。フフフ、フハハハハハ」
ゴーレムにこの怒りをぶつけることが先決です。

「ウォーミングアップ位にはできますよね」

羽ばたき、空に上がる。

港の村の方を見てみると、確かにゴーレムがそこにいた。

「ゴジラ位は、ありますかね」

近づきゴーレムの周りを一周。

ゴーレムは、追うように腕をはらうが……。

「ノロマですね。」

そんな早さでは、氷ますよ」

何時もの様に氷魔法を使おうとするが……。

「出てこない、一体どうして？」

まさか

「属性が反転したんですか」

試しに火を使うと簡単に出てきた。

今までどれだけ練習しても出なかった火が。

「なら、焼き尽くすのみ」

足下を焼き水分を無くす、すると泥人形は倒れた。

「土くれは動かないですからねえ」

ニヤリと笑い、ゆっくりと焼いていく。

「まずは、右腕から」

一気に肩口まで燃やしきり、右腕は焼け落ちた。

「威力は充分、次はじっくりと左腕を」

五本の指先からゆっくりと焼いていき

掌、腕、段々と炎が登っていく。

「木も使えそうですね。」

胴体は、木で壊しましょうか」

ダルマになったゴーレムの胴体に触れ、木を使う。

「これは、中々どうして、素晴らしい」

木は、ゴーレムに含まれていた水と養分を全て吸いとり大樹となった。

「羊皮紙も風化したようですし、終わりですね」

さて、宣教師はどうでしょうか？

村に戻ると、宣教師は生き絶えていた。

渾身のゴーレムが破られたと知り自害したのか、それとも……。

「考えても仕方がないでしょうね」

月の石を取り出して元の姿にもどり思考を中断する。

旅は始まったばかり、大陸に行くのも一筋縄では行きそうに無いなと思いつつ宿屋に戻る。

今日は少し疲れた。

「毛の色も変わりましたしね」

白に近いグレーの毛の色は、黒に近い灰色に変わって……。

一週間の道のり 三回目

早朝、日は登りきつておらず。まだ、月が空に残っている。何時もならば、獵師が森に向かう姿を見かけるだけなのだが。この日は、様子が違った。

「こいつは……た、大変だ！」

獵師が村の入り口で宣教士が倒れているのを見つけた。死体の喉には短刀が突き刺さっており既に生き絶えていることは明白であった。

獵師は、急いで村に戻りこの事を知らせた。その声は、村中に響き渡り月が沈みきる頃には大勢の人が集ったとゆう。

「それで、宣教士に絡んでいた俺たちに話を聞きたいと」

「お急ぎのところ申し訳ありませんが、捜査に協力していただけませんか？」

朝方、二日酔いで寝込んでいたところ女将に叩き起こされた。俺は飯屋の机で自警団の兎人に取り調べを受けている。

「……今日は厄日かな？」

こつも衝撃的な事が続けて起こるとは……。こつちは二日酔いで頭が痛むとゆうのに。

「顔色が悪いようですが？」

「あゝ、二日酔いだ。気にしないで欲しい」

「はあ？」

そう言つて、女将の置いていった水を呷る。兎人は、辺りを見回して……。

「あの、お連れの二人はどちらに？」

「ああ、やっぱり連れて来ないとダメか？」

「聞き込みですから」

思わず溜息を吐く、なんせ二日酔いで無くても頭痛がしそうな出来事の一因だ。

正直、どう説明すれば良いのやら。

「なあ、俺の連れがどんなか知ってるか？」

「勿論、麒麟の女の子と狼の『男性』の筈です」

「なんで、知っているのかを聞いても」

「宣教師を追いついた方々として噂になってますから。自警団として調べてあります」

「……はあ」

こちらの面子は把握済みとなると……ますます、合わせる訳にはいかない。

「すまないが、連れは俺より酷い二日酔いで寝込んでいる。聴取は俺だけにしてくれないか？」

「それは、少し困ります」
「そうか……なら仕方あるまい」

席を立ち、座敷に向かう。

兎人は、俺が連れを呼びに行くと思っているのか座ったままだ。
座敷には、確かに二人いる。
増えても減ってもいない。

しかし……。

「どうかしましたか？」

「お前をどうにかしたいんだよ……」

一人、性別が変わっている。

「なんで、お前は今朝になつたら女になつてるんだよ……」
「何度も言いましたが、私にもわからないのです」

女になつた狼牙は、しれつと応え。俺は頭を抱えた。

怒鳴れば、頭痛が酷くなるために文句は全てしりすばみになる。
何故、狼牙が女になつたのか。

そして、何故……。

「お前が夢の女に似てるのか……」
「知りませんよ。そんなこと」

狼牙の姿は、毛は黒に近い灰色に変わり胸も少し膨らんでいる。
本当にどうしてなんだろうか。

「今はそれより、自警団の方に説明しませんが」
「性別が変わった説明もか？」

「男装してましたでよろしいのでは？」

「お前、毛の色も変わってるんだぞ」

「……白粉でなんとか」

「どっから持ってくるんだその白粉」

「勿論、月の石を使います」

「……鏡も作れば良いとして、時間を稼げば案外いけそうだな」

「そうしましょう。」

竜牙さん、時間稼ぎはお任せしました」

「あつ、おい、待て、閉めるな……糞っ」

襖を閉められた。

俺は、肩を落とし頂垂れる。

「持つて四半刻だからな」

「わかりました」

そう襖越しに伝え、俺は頭の痛みを我慢しながら飯屋にむかった。

「なるほど……、それであなた方はそれを止めるために旅を」
「そうなるかな」

時間稼ぎとして、俺は教団を追っていることを話た。
行く先々で、こうした自警団に勧告していけば宣教は少し遅くなるかもしれないな。

時間稼ぎは思わぬ成果をだしそうだ。

「人間同士まったく上手くいつているのに、一体どこの誰がこんな事を考えたのやら」

「誰かは知らんが、宣教士には気をつける。一宗教だと思って侮ると痛い目にあう」

「よし、分かった。後の話は本部で聞かせてもらおうか」

兎人が立ち上がり、縄を持ってこちらに迫る。

「ちょっと待て、何で俺を捕まえようとする」

「死んだのは宣教士だ。」

そして、動機もあれば最後に目撃された時、近くにいたのもお前達。

本部に来てもらうには十分だ」

くそつ、二日酔いのせいで墓穴を掘った。

時間稼ぎにばかりに気がいつて、不味いことになってしまった。

立ち上がり、机を挟むように逃げる。

狼牙はまだなのか……。

周りは、何時の間にか野次馬に囲まれており、逃げることは難しい。

「観念するんだな」

「……クッ」

捕まるしかないのか？

諦めかけたその時。

「何です、この人ばかりは？」

狼牙が野次馬を割って現れた。

その姿は、男の時と同様に白に近い灰色の毛である。

ただ、着ている男物の着物が少し大きく布が余っていた。

「貴方は、この方の連れですね」

「ええ、それでは貴方が自警団の方ですね」

狼牙はチラリとこちらを見て、直ぐに視線を兎人に移した。

「……宣教士の死体が見つかったそうですね」

「はい、今朝早くに」

「港の村に向かう道で見つけたのでしょう」

兎人の言葉を遮り狼牙は死体の有った場所を言った。

「どうして」

「どうして、知っているのか。」

それは、私が目撃してるからですよ。

宣教士が死んでいるのをね」

狼牙は不敵な笑みを浮かべ続ける。

「昨晚、散歩をしてましたら宣教士に襲撃されましたね。」

まあ倒して捕縛しようとしたら逃げまして、追いついた頃には短刀を喉に突き刺して絶命してました」

言い切り、困ったものですと肩を竦める狼牙。

こいつ……。

「莫迦たれ、それじゃ余計に疑われるだろうが！」

事細かに状況を説明してさらに疑いを深めるようなことを平然とやりやがった。

しかし、狼牙は笑みを浮かべながら返してくる。

「普通でしたらね」

「……そうですね、嘘はついていないようですし今回は不問にしましょう」

「ええ、助かりました」

「ご協力ありがとうございました。と言って兎人は帰って行った。野次馬も散り散りになり残されたのは俺と狼牙だけ……。俺は、狼牙に兎人が見逃した理由を聞く。」

「どうして、兎人は帰って行ったんだ」

「ああ、私の証言が本当だと確信したからですよ」

「何を根拠に」

「人間、嘘をつく時は大なり小なり動揺します。」

それは、様々な形で表れるのですが最も信憑性が高いものとして心拍が挙げられるのです。

兎人は、耳が良いのでそれで確信したのでしょうか」

「そうなのか」

一応、納得はいく説明を受けてこの話は終わりにした。問題なのはこれからだ。

「狼牙、買い物なんだが食料の前に女物を買っておくほうがいいのか？」

「あつ、大丈夫ですよ。」

白粉と鏡を戻せば月の石で作れますから」

「……そうか」

要らぬ気をつかったようだ。

その後、狼牙が白粉を落とすついでに、麟を呼び、遅い朝食を食べて宿を出た。

二日酔いは何時の間にか収まっていたようだ。

村の市場、食料を買いに来たのだが。

「おや、娘さんかい」

「お兄さん、若いのにやるねえ」

「親子で旅かい羨ましいね」

行く先々で子連れの夫婦と勘違いされる。

狼牙の雰囲気と小さい麟、年の割りに落ち着いているらしい俺。

傍目から見ればそうかもしれないが……違うと言いたい。

俺が何とも言えない気恥ずかしさを味わっている最中も、悪ノリした狼牙はそれらしく振舞っている。

麟は、右手で狼牙の手を握りしめているのだが……何故、左手がこちらの手に伸びる。

その手を避けると麟はジッ、とこちらを見つめてくる。

「……」

「握らぬぞ」

「……」

「そんな目で見ても握らぬぞ」

「……グスッ」

「グッ、に、握らぬからな」

麟が今にも泣き出しそうな目で見つめてくるがこれ以上の羞恥には耐えられない許せよ。

「どうして意地悪するのですか」

「ぬう、しかし」

「まったく……仕方ありませんねえ」

そう言っただけで狼牙は麟を抱き上げてあやす。

そして、こちらに意地悪な笑顔を向けて周囲に聞こえるように言う。

「麟、お父さんが意地悪するからって泣いてはいけませんよお」

「な、何を言っただけ」

「まったく、手を繋ぐくらいしてあげても、よろしいではありませんか？」

お、と、う、さ、ん

や、やられた。

師匠に悪戯される側の人間だと思って油断していた。

こ、こいつも悪戯する側の人間だ！

もっと早くに気づくべきだった。

「やあねえ、狭量な父親は……」

「きつと、亭主関白で老人になったら家にいるだけよ」

「あんな小さい子に意地悪するなんて信じられないわ」

周囲の中傷が胸に刺さる。

俺は……。

俺は……。

俺は、羞恥心を捨てた。

「お、お父さんが、わ、悪かった。

麟、許してくれ」

大衆の前で頭を下げた。

「……手」

「うん？」

「……手……繋いで」

「あ、ああ、いいだろう」

麟から差し出された左手を握る。

それを見て狼牙は麟を降ろし右手を握る。

「麟、嬉しいですか？」

「うん」

「それは良かった」

可愛らしい笑顔を浮かべて麟が言う。

狼牙もそれに笑顔で返す。

辺りから、拍手が起こった。

何だコレは？

納得はいかない。けれど、不思議と悪い気はしなかった。

「……今はウソだけど」

「何か言ったか？」

「いえ何も」

「……そうか」

夢の女に似た空気を一瞬感じたが直ぐにいつもの狼牙に戻った。

この時に、狂気に気づけば何かが変わったのかもしれない。

彼の中に彼女が産まれてからの変化に。

買い物を終えて村を出た。

旅の空は何処までも落ちていけそうな位に深い青空で酷く自分が小さく思えた。

「家族か……」

「また、やります」

「いや、今はまだやることあるから」
「そうですか」

では、それがすみしたら……。

一 週間の道のり 三日月（後書き）

二作前のゴーレムについて少し改訂しました。

また、作中で解説していなかった金銭についてですが。

銅貨一枚＝十円 として。

銀貨一枚＝銅貨百枚

金貨一枚＝銀貨百枚

となります。

質問等は随時、受け付けております。

一週間の道のり 三日目 夜

雲一つない空に、煌く星々、月も綺麗に見える夜。
日暮れ前に、次の村に着いた私達は宿を取り休む事になった。
今、私は一人、村の外で空を見上げている。

「家族」

頭の中に染み付いた言葉。
私には、家族がいる。

けれど、血は繋がってはいない。
失礼だが、何かが違う気がした。
その異物感が昨日から大きくなった。

「昨日の事」

昨夜、竜牙さんの幼さに隣を重ねた。
彼もあの娘も家族がいない。
だから、私が守らないと……。
そう思っていた。
けれど、本当は違うのでは無いだろうか。

「私は狼」

この月の石は、その人に最も近い性質を持つ生き物に変える。
私は狼。
狩猟民族にとっては畏怖

農耕民族にとっては畏敬

その姿は、残酷な印象を与える

その姿は、慈悲深い印象を与える

敵には容赦せず

味方には寛大に

月と太陽

相反する性質を保つ

そして私は一人

「一匹狼」

狼の群れは、基本的に家族で構成される

けれど、私は一人

他所の群れに入るも馴染みきれない

子供達の世話をやいたのは、その痛みを和らげるためなのか

一匹狼は、広大な世界から番いを見つけたす

けれど、そんなことが出来るのはほんの一握りだけ……多くは道

半ばで倒れる

だけど、妾は見つけたのかもしれない

同じ境遇、同じ性質を持つ者を

「竜牙」

竜の子にして龍の子

その性質は歪められたがまだ間に合う

悪魔としての竜

神獣としての龍

残酷な印象を与える竜

慈悲深い印象を与える龍

火と水

彼が完成すればきつと……

妾と同じになる

きつとそれに彼も気づく筈

そしてワタシの……

「家族になつて」

「今までを取り戻す位、幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに
幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに幸せに……なるの」

だ、か、ら、早く教団を潰さなくちゃ

「それまで待っていて下さいね。
リュウガ」

フフ、フフフフ

暗い夜の中星々の煌きも、月の明かりも、全てが彼女に敵わない
彼から産まれた彼女は、その産声を上げた

無邪気は、時に悪意を上回る

純粹は、時に全てを上書きする

その眩しさは、目を眩ませる

そう

誰もが目を背ける程に黒い毛の彼女は真っ白だった

一週間の道のり 三日目 夜（後書き）

狼牙の心理状態

男性↓私

女性↓妾

?? ↓ワタシ

読みは一括して、『わたし』

矢張りまだ甘い気がする。

彼女の狂気には程遠い

一週間の道のり 四日目

昨日の日暮れに着いた村、ここが、出雲までにある最後の村であり後は未整備の道に行く。

そのため、今日一日、買い物を済ませたら各々自由に過ごすことを提案した。

「……という訳で、今から自由行動だ。

この部屋で休むも良し、買い物に行くも良し、夜まで好きにする
といい」

きつと、二人は村に出かけると踏んでの提案だった。

そして、俺はその間に後回しにしていた訓練を一人でしょうと思
っていたのだが……。

「竜牙さん」

狼牙が少し機嫌が悪そうに言う。

「何だ？」

「……出来るんですか？」

カラダが硬直した。

暴露している、間違いなく。俺の考えは暴露している。

「……」

黒い瞳がジッとこちらを見つめてくる。

それに耐えられず顔を逸らす。

「妾に頼ってはくだらないのですね……」

狼牙の悲しげな声が耳に入る。

いや、何故そんなに悲しげな声で言う。

「俺なんぞに構わなくて済むし、麟の相手も出来るのだから。清
々すると思っただが？」

「だとしても、妾が貴方を反故にすると思っただのですか？」

見てみると、狼牙が訴える様な目でこちらを見つめている。

その瞳が、怒りと悲しみに潤んでいる。

俺は、それを取り除くために口を開いた。

「俺の訓練に付き合わせてもいいのか？」

「もちろんです」

効果はあったようだ。

狼牙の笑顔と答えにより、この問題は解決した。

俺は、問題が解決した事と、彼女を悲しませなかった事にホッと
した。

ん？何故、俺が彼女が悲しまなかった事にホッとする。

「どうかなさいましたか？」

「いや、何でも無い」

考えたところで理由はわからない。

とりあえず、これは後回しにすることにした。

「それじゃあ、早速だが訓練を始めてくれないか？」

「ええ、始めに講義、次に実践という形でかまいませんね？」

「それで頼む」

狼牙は、では始めさせていただきます。と言い講義を始めた。

「月の石、これ自体は無機物になら何にでもなる事ができます。

これはよろしいですね」

「ああ、実際に天幕や武器には利用した事がある」

質問にこたえる。

それに狼牙は頷いて講義をつづける。

「では、応用です。」

月の石によって作られた道具……貴方はコレをどのように考えま
すか？」

不思議な質問だが必要なのだろっ、真剣に考える。

「それは……天幕は天幕、武器は武器だ。月の石によって作られ

た物として見ている」

その答えに首を横に振る。

そして、少し強調して告げた。

「それがいけないのです。」

月の石は、どれだけ姿形が変わっても月の石でありつづけます。

そして、月の石は想像する事によって姿を変えているのです」

「つまり、俺は作った道具をその道具として考えている。

そのため、天幕の幕は幕でしかなく、骨組みは骨組みでしかない。

何故なら、俺がそう認識しているから」

合点がいった。

狼牙は、大きく頷き顔を綻ばせる。

「そのとおりです。」

その様子ですと答えもわかりましたね。

早速、試してみましよう」

「そうしてみる」

俺は、懷から月の石を取り出して小さな刀に変化させる。

そして、刀を月の石であると考えながら。もう一つの刀が持ち手

から分離するように出てくる事を想像する。

持ち手からゆっくりと、もう一つの持ち手が生えてくる。

ソレを掴み、引きずり出すと……。

「上手くいったな」

両手に同じ刀が握られた。

「初めてにしては、上出来ですね」

狼牙に誉められた。

何となく、気恥ずかしいが悪くはない。

「ありがとう、君のおかげだ」

「いいえ、それほどでもありません」

謙遜する彼女の顔には、笑みが浮かんでいる。

「思っていたよりも、早く終わりましたね。これからどうしますか？」

彼女は表情を戻し、提案する。

それを少し残念に思う自分に驚いたが、
気どられない様に振る舞う。

「好きなようにするといい。」

俺はもう少しここで、訓練をしている」

「そうですか。」

では、妾と麟は村を見えます」

彼女が立ち上がると麟もそれにつられて立ち上がる。

「気をつけて、行ってこい」

「もちろん。お土産を買ってきますから楽しみに」

そう言って二人は座敷から出て行った。

「さて、必要なのは速さと量か？」

いや違う、まずは月の石に限界が無い事を認識する事だな」

そして、夜に帰ってきた二人が見たのは座敷を埋め尽くす無数の

物品とそれに埋れている俺の姿だった。

一週間の道のり 四日目（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1309x/>

竜の詩

2011年10月20日04時15分発行